

Bahā と Bahi

——ネワール仏教寺院考——

吉 崎 一 美

ネワール仏教には、バハ Bahā (Bāhā) とバヒ Bahi と呼ばれる2タイプの寺院がある。建築様式上からはその中間形態のものも認められるが、それらは実際には、いずれもそのどちらかとして機能している。John K. Locke は「仏教サンガがいかなる階級の者にも開かれていた頃には、バヒは僧院 vihāra の入門施設であって、比丘はそこで初歩の訓練を受けた。それを終えると、彼は具足戒を受けた比丘となってバハに移る。ここで彼はさらにバジュラーチャールヤとなるための訓練に励むのである」(Karunamaya, 1980, p. 19) とする。David N. Gellner はそれを受けて「(バヒの) メンバーが(そのようにして) バハに移行したことは間違いないが、そうしたことがらは理論的には許容しがたいので、それをあとづけたり、証明することはむずかしい」(The Newar Buddhist Monastery—an anthropological and historical typology, Nepalica 4, 1987, p. 398) としつつも、「バヒは純正な僧院主義の時代からの生き残りである—というよりも、そのように示すように意味づけられた—ものである。(中略) それ故に数で勝るバハの主流に対して、(バヒは)〈それよりも純粋な存在〉という優越性を明示するために、建築上でも、儀礼上でも(バハとは)相違がある」(同 p. 385) とする。本稿はこれらの見解を受けて、バハとバヒの相違が、ネワール仏教の持つ儀礼の二重性に対応していること、そしてその二重性が密教の側から統一されているように、バヒもまた建築上の視点から見て、密教的世界を具現するバハの側から特徴づけられていることを明らかにしたい。

バハは、バジュラーチャールヤによって行われる Kalaśa pūjā を建築理念としている。バジュラーチャールヤは kalaśa (水瓶) の中に儀礼の本尊となる仏神を招き寄せる。それが完了すると、水瓶の上に五色の糸 paśūkā を結んだ金剛杵をのせる。招き寄せられた仏神と彼はこの糸を通して一体化する。この糸は両者が通い合う通路である。この関係は、バハの屋根にある鈴形の飾り gajū (gajūr) と、そこから垂れ下がる一本の細長い带状の金属板 dhvaja (または patā, patākā)

に当てはまる。同じ原理はバハの平面構成にも応用されている。

この水瓶はすでに論じたように、色究竟天の象徴である。それに対してバヒは、須弥山の構築をその建築理念とする。これはバヒの屋根にある尖塔（バハの *gajū* に対応する）が須弥山の形状と相似することから理解できる。この尖塔は *phuḍā*, *pūḍā*, *pūcā* (Nepalica 3, p. 57) といい、また *puco* (D. Gellner 前掲論文 p. 370) と呼ばれる。その形状は下辺が狭く、上に広がっていく四角形の望楼である。春日井真英氏によれば、「須弥山の形態は資料によれば(1)垂直にそびえている（『世記経』）、(2)下に狭く上はしだいに広くなり、平らかである（『大棲炭経』）、(3)下に狭く、上に闊く、しだいに寛大となり、端は直にして曲らず（『起世経』『起世因本経』）とある」（「須弥山の構造について—その垂直面からの考察—」, 印仏研究 28-2, 1980, p. 648）という。バヒの尖塔 *phuḍā* はこの逆ピラミッド型の須弥山の形状と一致する。またその四角形の望楼は須弥山頂の善見城を思わせる。「〔ス〕メール山の頂上においては三十三〔天〕がある。そしてそ〔の山の頂上〕は〔一辺が〕八万〔ヨーjana〕の空間を占めている。〔そして頂上の〕四隅にはヴァジュラパーニ〔半神〕達が住している四つの峯がある。〔さらにスメール山の頂上の〕中央において一辺が二千五百〔ヨーjana〕,〔高さが〕一ヨーjana半の、黄金製であり、表面が種々に色どられた柔軟なる、スダルジャナという名の都城がある」（福原亮厳監修、『阿毘達磨俱舍論本頌の研究-界品・根品・世間品』, 1973, 世間品第65-66頌）という。

バヒが須弥山世界を表現するとすれば、バハの基壇は地表面よりも低く掘り下げられているのに対して、バヒの基壇は地表面よりも高い (Wolfgang Korn: *The Traditional Architecture of the Kathmandu Valley*, 1976, p. 36) のは、バヒが寺院全体の立体構成でも、須弥山を登っていく（またはそこから降下する）過程を表現するといえるのに対し、バハの立体構成は、まったく「水瓶（壺）」の内部であることを目指していると指摘できる。「バハとバヒでは中庭に面する壁面の構成は、大きく違っている。すなわち、れんが壁面によって主体構造を形成するバハに対して、バヒは吹放ちで構造的には柱梁で構成されている」（篠野志郎、「ネパールの中庭形式の建築における意匠の特徴と系譜—パタン王宮の中庭回り壁面構成—」, 仏教芸術152号, 1984, p. 111）こと、また閉鎖的な中庭を持つバハでは、「各棟が左右対称の壁面構成を示している」（同 p. 120）という指摘は、明らかにバハがその立体構成においても「水瓶（壺）」であることを意味している。それでバヒとバハに共通して、その中庭に一基の仏塔 (J. Locke のいう *official caitya*) が存在する

のは、バヒでは僧院 *vihāra* と仏塔の並存というインド仏教の伝統を継承するといえるが、バハでは、それは太古のカトマンズ盆地にスバヤンプーの仏塔が生起する伝説を模倣しているといえる。

このようにバヒが須弥山世界を、またバハが色究竟天を表現しているとなれば、このことはネワール仏教の持つ儀礼の二重性という特徴と対応することになる。

①「カトマンズ盆地のバジュラーチャールヤたちが行う儀礼の基本は *gurum-aṇḍala-pūjā* (G. *pūjā*) と *kalaśa-pūjā* (K. *pūjā*) である。護摩の儀礼がそれに続くことが多い。この一連の儀礼では G. *pūjā* によって須弥山世界を構築し、その須弥山世界（の頂上）に *guru* = *Vajrasattva* を配置し、あわせてその世界での行者の位置と日時などを表白文の読誦によって確定する。続く K. *pūjā* では、須弥山より遥か上方に色究竟天を設定し、そこに置かれた *kalaśa* の中に儀礼の本尊となる仏神を招くのである。護摩は招かれた仏神に対して執り行われる」（拙稿「*kalaśa pūjā* とその造形」, 印仏研究40-1, 1991, p. 338）。

② 仏教僧侶カースト（シャーキヤとバジュラーチャールヤ）の少年が、それぞれの寺院に正式に登録されるための儀礼 *bare chuyegu* では、彼らは出家から還俗への一連の儀礼を受けるが、バジュラーチャールヤの少年はその後に、バジュラーチャールヤとしての権能を授与するための灌頂儀礼 *ācā luyegu* を受ける。「灌頂は護摩などを行う資格を与える」（*Badriratna & Ratnakāji Vajrācārya: Nepal Jana-jivan Kriyā Paddhati*, NS. 1083, p. 9）というが、この儀礼は換言すれば、K. *pūjā* を執行する権能を授与するとも考えなければならない。*Bare chuyegu* を受けただけのシャーキヤ、また *ācā luyegu* を受ける前のバジュラーチャールヤは、*bare chuyegu* において G. *pūjā* は実修したけれども、彼らは K. *pūjā* を実修する許しを得ていないので、本尊を招いての護摩儀礼を執行する資格は持たない。つまり彼らは須弥山頂には登っているが、いまだ色究竟天には昇っていないので、そこで仏神にまみえる儀礼的能力を備えていないのである。

こうしてバヒは須弥山世界を表現して、そこにはシャーキヤのみが止住する。バハはバジュラーチャールヤと、その地位に至るために訓練中のシャーキヤとで構成されるので、色究竟天までを表現するのである。

ネワール仏教の示す、こうした二重性は、常に後者（密教）の側から前者を包含するように設定されている。G. *pūjā* においては、須弥山頂の主は帝釈天から金剛薩埵に変わり、須弥山世界は密教的に再編成されている。またシャーキヤは常にバジュラーチャールヤに昇進するための前段階にある者のように規定される

ことで、この二重性は成立している。パジュラーチャールヤが用いる儀礼用の鈴 *ghaṇṭā* は *gaṇḍī* の機能をも合わせ持つかのようであり、その *gaṇḍī* は須弥山頂で打ち鳴らされる（大智度論第二、望月仏教大辞典による）という。金剛鈴はすでに論じたように色究竟天に通じている。それでこの二重性は色究竟天と須弥山の対応としても表現可能である。

同様に、バヒにもまた建築上の観点から、いくつかの密教的要素がある。これらは須弥山世界を表現してシャーキャのみで構成されるバヒには奇異なものであるが、これも実はバヒが、「純正な僧院主義の時代からの生き残りである—というよりも、そのように（見えることを密教の側から規定されて）示すように意味づけられた—もの」だからである（カッコ内は筆者による）。建築上から見たバヒの密教的要素は次のとおりである。①タントラ神をまつる秘密の部屋 *āgaṃ* の存在。②いくつかのバヒには入口や本堂の上に *toraṇa* がある。また W. Korn がバハの特徴としてあげる入口の獅子像も、いくつかのバヒに存在する。③バヒの望楼 *phuḍā* の上には、しばしばバハに見られる *gajū* が取りつけられている。望楼は須弥山を、*gajū* は色究竟天を象徴するから、バヒに所属して須弥山頂にまで登ることのできるシャーキャには、色究竟天は眺めることのできないものである。「神通力と他者に依ることなくして、これら〔天の神々〕は上方〔の天の神々〕を認識することはない」、すなわち「彼ら〔下の住処に生まれた者〕は上〔の天〕を見ることはない」（前掲、俱舍論世間品第72頌後半）とある。

以上に述べたバハとバヒの関係は、17世紀以降に定着したもののようなのである。バヒの望楼は後世の付加物であり、17～18世紀以後の設置であるとする指摘（R. Becker-Ritterspach: *Gestaltungsprinzipien in der Newarischen Architektur*, 1982, p. 305）、またバヒのタントラ神をまつる秘密の部屋 *āgaṃ* も *Siddhinarasimha Malla* (AD. 1619-1661 在位) の改革後にバヒにもたらされたとの推測（D. Gellner 前掲論文, p. 409）がある。そして「今日では、バハとバヒの対立というものはもはや存在しない。ネワール仏教のゆるやかな在家化と、バヒの規模の縮小は、かつては厳密に維持されていた対立を単に習慣の相違にしまったのである」（D. Gellner 前掲論文, p. 411）。Bahā の語源が *vihāra* から派生したとするのに対して、Bahī が *bahir*(out または outside) を語源とするという説明は、バヒが空間的な意味で町の「外」側にあるということではなく、むしろバハ組織から「外れた」という意味であることに注意する必要がある。

〈キーワード〉ネワール仏教、色究竟天、須弥山

（東洋大学大学院修了）